

Title	S.プリースト, 『心と身体の哲学』, 河野哲也・安藤道夫・木原弘行・真船えり・室田憲司訳
Sub Title	"Theories of the mind", S. Priest, translated by T. Kono, M. Ando, H. Kihara, E. Mafune, K. Murota
Author	河野, 哲也(Kono, Tetsuya)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1999
Jtitle	哲學 No.104 (1999. 12) ,p.65- 70
Abstract	
Notes	訳書紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000104-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 訳 書 紹 介 —

S. プリースト 『心と身体の哲学』

河野哲也・安藤道夫・木原弘行・真船えり・
室田憲司訳，勁草書房，1999年。

— 河 野 哲 也* —

皆さんの多くは、次のような疑問を感じたことがあるにちがいない。

私は複雑な物理対象にすぎないのだろうか。さもなくば、心として存在しているのだろうか。では心とはいったい何だろう。心身は正確にはどう関係しているのだろうか。…われわれは非物質的な魂で、死後も生き続けることができるのだろうか。それとも、私は脳髄にすぎないのだろうか。（「序論」）。

あるいは「動物に心があると認めてよいのか」とか、「将来、コンピュータは思考できるようになるのか」などと自問した人もいない。心は、人間を人間たらしめ、私を私たらしめている当のものに思われる。この意味で、心の存在は、私のアイデンティティに深く関わっている。だが、その心とはいったい何を指して言うのだろうか。それは身体との関係で、どのように定義したらよいのだろうか。

こうした、心身の関係や心の定義に関わる哲学を、「心の哲学」と呼ぶ。本書『心と身体の哲学』は、その見取り図を示してくれる概説書である。著者のスティーブン・プリーストは、古代から現代に至るさまざまな理論を紹介し、それぞれを丁寧に解説している。心の哲学に関しては、日本でもすでに相当数の翻訳書が出版されている。しかし、専門家向けの最新の議論が多く、初心者にとってはしばしば難解である。また、現代の心の哲

* 防衛大学校助教授，慶應義塾大学文学部非常勤講師

S. プリースト『心と身体の哲学』

学はおもに英語圏で研究されているため、どうしても独仏語圏で発展してきた理論は等閑視されがちである。この点で、『心と身体の哲学』は、デカルトやスピノザのような古典や、観念論や現象学なども取り上げており、概説書としてのバランスに優れている。これから心の哲学を学びたいと思っている人や、この分野を概観しておきたいと思っている人に有益である。以下、内容を簡略に解説する。

*

本書では、心身二元論、論理的行動主義、観念論、唯物論、機能主義、二面説、現象学といった心の哲学の代表的立場が順を追って紹介され、結論部で著者自身の立場が打ちだされる。

「心身二元論」では、プラトンとデカルトが取り上げられる。二元論とは、心と物体（身体）はそれぞれ独立の実体であるという説である。心は非物質的な実体であり、身体がなくとも存在できるとされる。とくに、近代哲学における主観－客観の峻別をもたらしたとされるデカルトの二元論は有名である。二元論は、一見すると、魂の不滅を認めている点で時代遅れに映るかもしれない。しかし、「意識」という存在の不可思議さを考えたときに、二元論に魅力を覚える人たちは現在でもいるのである。

一方「論理的行動主義」によれば、「心」と呼ばれているものは、決して実体などではなく、じつは行動のことである。考える、望む、知覚する、思い出すといった心理状態はすべて、何らかの行動として理解されねばならない。この章では、ヘンペル、ライル、ヴィトゲンシュタインが論じられる。ライルによれば、デカルトの精神実体論は、言葉の誤用によって、実在していないものを実在していると仮定しているにすぎない。たとえば、優しい人とは、優しいとされる行動パターンを取る人のことである。「優しい」などの心の性質は、心という実体（名詞）を修飾する形容詞ではなく、行動（動詞）を修飾する副詞である。今日の心の哲学は、このライルのデカルト批判に始まったと言ってよい。

「観念論」は心だけが存在するという理論である。存在するものは意識のなかだけに存在でき、物理対象も心から独立には存在しえない。つまり、常識的に「物理的」とされているものは、じつは心的な出来事である。これは決してばかばかしい考え方ではない。実際、経験したことがないものを、どうして「存在している」などと言えるだろうか。18世紀の哲学者、バークリは、「存在するとは知覚されることである」と主張した。この考え方は形を変えて（たとえば、実証主義や反実在論という形で）、現在でも科学哲学などで一定の支持を受けている。またヘーゲルは、「自己意識は社会的なものだ」と指摘した点において重要である。たしかに、心を対人関係や社会性の側面から捉える観点は、現在の心の哲学には欠落している。プリーストは、観念論を心身問題解決の試みとして公平に評価している。

「唯物論」は、古代ギリシャのデモクリトスやエピクロスにまで遡ることのできる長い伝統を持った考え方である。近代哲学においては、ホッブスやラ・メトリ、ドルバックなどに代表されるが、現代の唯物論は「心脳同一説」として展開されることになる。この考え方は、脳が心を「生み出す」と言っているのではない。心と脳は、文字通り「同じもの」なのである。この説は、プレイスやスマートなどのオーストラリアの哲学者が中心になって展開した。また米国のデイヴィドソンは、「非法則的一元論」や「付随性」という影響力のあるアイデアを提案した。心脳同一説は、生理学者にも支持者の多い有力な見解である。

コンピュータはどれだけ人間に近づくことができるのだろうか。英国の数学者、チューリングは、その入力と内部状態によって出力が定まる単純な機械（チューリング機械）を考案した。これが現在のコンピュータの基礎となる。「機能主義」とは、この機械をモデルにして人間の心を理解しようとする立場である。つまり、人間の行動も、その感覚入力と内部状態によって定義できる。心とは、感覚入力と行動出力をつなぐ関数（機能）

S. プリースト『心と身体の哲学』

である。機能主義は、現在の認知科学や心の哲学の主な立場のひとつである。

心と物体（身体）は別々の実体ではない。それは、心でも物でもない別のある実体の二つの側面にすぎない。これが「二面説」の主旨である。スピノザ、ラッセル、ストローソンはこの点で共通している。17世紀の哲学者、スピノザによれば、精神と物体は、唯一の実体である神の二つの側面（性質）を表している。現代の哲学者、ストローソンによれば、「人格」こそが人間にとって根本的であり、それをある視点から眺めれば「身体的」と呼ばれ、別の視点から見れば「心的」と言われるのである。

多少とも心の哲学を知る人にとっては、「現象学」に一章が割かれているのは意外に思えるかもしれない。先に述べたように、心の哲学は英語圏を中心にして展開され、現象学が言及されることは多くないからである。現象学は、ブレンターノやフッサールを祖として、おもに独仏語圏で発展してきた現代哲学である。彼らは、意識の本質特徴を、「志向性」すなわち、「対象へと向かい、目標を目指す性質」として捉える。現象学は、心を目的論的性質を持ったものとして理解する。こうした現象学の観点は、生物学的機能の延長として心を考えようとする最近の認知心理学と共通性を持つはずである。

「結論」では、著者自身の見解が示してある。それは一言でいえば、人間の心を「脳の働き」と見なす立場である。そして脳は、生物体の環境を現象的世界へと変換する「環境変換装置」である。この立場は自然主義的現象学という新たな現象学の動向を踏まえていると言えよう。

*

以上が、『心と身体の哲学』のごく簡単な紹介である。すでにお気づきとは思いますが、心の哲学は、心理学や認知科学、あるいは脳生理学の動向と密接に連動している。

たとえば、ライルは、自分の立場が心理学の行動主義に近いものである

ことを認めていた。古典的な人工知能研究は、機能主義の発想から生まれた。あるいは、80年度以降発展してきた「コネクショニズム」と呼ばれる認知科学の立場は、脳生理学とコンピュータ・サイエンスを結びつけようとする。これは心脳同一説と近い考え方に立っていると見ることもできる。また、ゲシュタルト心理学者が採用する実験現象学（ないし記述的現象学）は、ブレンターノにその着想を得ている。さらに現象学には、J. J. ギブソンの生態学的心理学との共通点を見いだすこともできるだろう。現代の脳生理学者のなかには、「知覚は脳が生み出すヴァーチャル・リアリティだ」と主張する者もいるが、これは現代版の観念論と言えるかもしれない。

「心の哲学」は、心と身体がどのような関係にあるのかを規定し、心に関する科学的な研究はいかなる方法に基づくべきかについて考察する。それは、心理学や認知科学の基礎や方法について考えるという意味では、一種の科学哲学だと言えよう。

このように、心の哲学は哲学固有の問題にとどまらない。今あげた分野以外にも精神医学、生物学、社会学など、おおよそ心や精神を扱うすべての学問と関係している。あるいは、医学や遺伝子工学などの先端科学が引き起こす倫理上の問題とも無関係であるはずがない。しかし、現在の心の哲学は、非常に専門化しており、議論が煩瑣になりやすい。そうであればこそ、本書のように、この分野の見取り図を示してくれる概説書が必要とされるはずである。

*

最後に著者のスティーブン・プリースト (Stephen Priest) について、ひとこと案内しておこう。私は著者と直接の面識はないが、翻訳を進める過程で電子メールを使って何度か質問や意見をやり取りした。著者は、オックスフォードに生まれ、ケンブリッジで哲学を研究した。現在エジンバラ大学哲学科の講師であり、本書以外の業績として、『イギリス経験論

S. プリースト『心と身体の哲学』

者—ホップズからエイヤーへ』(単著, 1990), 『メルロ＝ポンティ』(単著, 1998)などがあげられる。現在ジャン・ポール・サルトルについての本を執筆中とのことである。

連絡を取ると大変に喜ばれ, 丁寧な履歴と「日本語版への序文」, 「禅の無心についての覚え書」をわざわざ寄せてくれた。こちらからの質問や意見にも気軽に応じてくれたことも, ここに記しておきたい。